

東急王国に行く その1 五反田から蒲田へ 池上線の旅

昭和30年代から40年代の東京の私鉄の鉄道網はわかりやすかった。

山手線の西側に伸びる私鉄の線路は、池袋から孤高の存在のような東上線が北西に走り、池袋・新宿から東上線の南側を扇状に抑える西武鉄道の池袋線と新宿線。

中央線を境に南側は、京王帝都と小田急が南西に領域を伸ばし、渋谷以南では東急電鉄が渋谷・目黒・五反田・大井町・蒲田から網の目のように鉄道網を巡らせていた。

京浜東北線より南側は京浜急行の独壇場で、他社が入り込む余地はなかった。

一方、山手線の東側では、京成電鉄と東武鉄道が、他社に侵される心配のないエリアを守っていた。

山手線の西側の私鉄の鉄道網だけを見ても、昭和30年代には思いつきもしなかったような出来事が数多く発生している。そのいくつかの出来事のうちのひとつが、「他社鉄道網との相互乗り入れ」でさらに、東京都心を押さえていた地下鉄（東京メトロ）との接続を介して、三社以上の相互乗り入れが行われるようになって、埼玉・東京・神奈川のような三県を繋げる相互乗り入れが実現したことである。利用者にとっては利便性が向上したことは勿論ではあるが、乗車する電車を間違えるととんでもないところへ連れていかれる可能性があるという新しい心配事も出てきた。

昭和30年代の半ば頃は、渋谷・目黒・五反田から東急電鉄が各地へ向かって走っていた。

渋谷からは、横浜へ向かう東横線が走り、玉電が路面電車のような電車を走らせていた。

目黒からは蒲田へ向かう目蒲線が、五反田からは池上線が出ていた。これらの線を結び横切るように走るのが、大井町と二子玉川を結ぶ大井町線だった。

これらすべてを合わせて「東急電鉄の王国」のようなエリアだった。

<1> 歴史

大正12年（1923年）に、目黒から丸子（現在の沼部）までが開通し、同年11月に目黒・蒲田間が開通したのがスタートだった。（目黒蒲田電鉄）

次のステップは、大正15年（1926年）の丸子多摩川から神奈川までが開通。これが現在の東横線の始まりで、目蒲線と相互乗り入れをして、目黒と神奈川を結んだ。つまり発足当時の東横線は渋谷発ではなく、目黒発だった。（東京横浜電鉄）

そして、昭和2年（1927年）に東京横浜電鉄が渋谷・丸子多摩川間を結び、渋谷・神奈川間を結ぶ東横線が誕生した。現在の池上線を動かしていた池上電鉄も合わせて、鉄道会社の統合・合併が行われて、五島慶太の東急王国が出来上がった。

そして、それから何十年経った今、さらなる発展があり、現在は下表のようになっている。

| 現在の路線名 | 起点駅 | 終点駅 | 他社との乗り入れ（東京 M=東京メトロ） |
|--------|-----|------|------------------------------|
| 東横線 | 渋谷 | 横浜 | 東京 M 日比谷線・東武線・横浜高速鉄道 |
| 田園都市線 | 渋谷 | 中央林間 | 東京 M 半蔵門線・東武線 |
| 大井町線 | 大井町 | 溝の口 | （自社田園都市線と乗り入れ） |
| 目黒線 | 目黒 | 日吉 | 東京 M 南北線・埼玉高速鉄道・相鉄線・（自社新横浜線） |
| 池上線 | 五反田 | 蒲田 | |
| 多摩川線 | 蒲田 | 多摩川 | |
| 新横浜線 | 日吉 | 新横浜 | （自社目黒線） |

<2> 池上線の旅(五反田から蒲田へ)

3月12日、八千代台発 10:52 の西馬込行に乗ると五反田には12時過ぎに着く。昼飯をとらずに東急の乗り場へ急ぐ。寒くなく、ぶらぶら散歩にはちょうど良い日だ。



- 五反田 山手線五反田駅の南端のビルの高みから出発する池上線は、不思議な景観だったが、今も変わらない。(右画像) 目黒川の岸边から見上げると、五反田の地形がよくわかる。各地に一反田・二反田から五反田・六反田・一丁田という地名があるが、農地(田圃)の広さから生まれたものが多い。この地でも、広い田が広がることから「五反田耕地」の名が付く、上大崎村の字地名として残った。海拔30mほどの白金台地の南側を北西から南東に流れる目黒川の岸边は肥沃な農地だったに違いない。
- 大崎広小路 大崎という地名は、台地の先端(尾崎)という説もあるようだが、由来は不明らしい。やや高めの高架を南西に向かって走る電車の窓から見下ろす目黒川の流れが、何だかっこよく見える。高いビルが立ち並ぶようになったため、車窓から遠望は得られない。江戸時代に、火災に強い街づくりが進められて、延焼を防ぐために作られた広い街路に広小路と名が付いた。大崎の広小路は江戸時代にできたものかどうか分からないが、広い街路が造られたことは確かなようである。
- 戸越銀座 昼食をとるために、ここで下車する。踏切を挟んで東西に長く伸びる戸越銀座商店街をぶらついてみた。しゃれたカフェと書かれた看板が出ている店に入りカレーライス。戸越の商店街は関東大震災で大きな被害が出て、商店街の復興に際して「銀座レンガ街の瓦礫」が活用されたことから、以降「戸越銀座商店街」という名になったとのこと。低湿地だったことから、谷戸越(やとごえ)・谷戸越(やとごし)が転じて戸越(とごし)と名が付いたようだ。商店街を横切る小道はどの道も上り坂になっているので、ここが低地であることがよくわかる。戸越銀座駅を出ると、地下または半地下のようになる。
- 荏原中延 昭和2年(1927年)の池上電気鉄道の開通時に、「荏原郡荏原町大字中延」の地名から駅名ができた。荏原と言う地名は、七世紀後半に遡るもので、荏原評(ごおり)・荏原郷の存在が確認されている。
- 旗の台 半地下から出て車窓の景色が楽しめるようになると旗の台駅に入る。この駅は大井町線と交差する乗り換え可能な駅である。地名の由来は旗岡八幡神社。平忠常の乱を鎮圧するために源頼信が、この神社で戦勝祈願をした。各地に存在する「源氏の白旗(白幡)伝説」のひとつ。旗岡八幡神社は、駅の東方にあるが、大井町線の荏原駅の方が近い(駅前)。
- 長原 環七の下をくぐると長原駅になる。荏原郡馬込村字長原の地名からできた駅名だが、現在は長原と言う地名は存在しない。周辺は、海拔25~30mの台地の中にある低湿地や窪みが点在する所なので、「長い原」と言うべき地形が存在したのかもしれない。
- 洗足池 中原街道が並走して、最も接近するようになったところが洗足池駅。駅の北側に水を満々と湛えた池が広がる。穏やかな日を浴びて、洗足池の畔を散歩して見ることにした。北に海拔35mほどの大岡山、北東に武蔵小山、東が旗の台と高地らしい地名が並ぶ。ここは天然の窪地で、昔から湧水や台地からの絞り水が溜まる池だった。(右画像)



平安時代に遡ると、ここは千束(せんぞく)と言われていた。千僧供料(せんそうくりょう)という寺領の免田で、千束の稲が貢租から免除されていたのが地名の由良。のちに日蓮上人が身延山から常陸へ湯治に行く時に立ち寄り、この池で足を洗ったという伝承が加わり、千束が洗足に変化したらしい。それゆえに、千束と洗足の二つの地名が存在する。

池の西岸を千束八幡神社まで歩いて、またもとの道を戻った。

- 石川台 呑川は上流の方では、通称として石川と呼ばれており、開通当時は荏原郡池上村大字雪谷字石川という地名だった。開通時の駅名は「石川」だったが、昭和3年(1928年)に石川台と改称された。

- 雪が谷大塚 「雪」という、この地とのつながりがありそうもない語が含まれる地名の由来が気になったが、由来を示す情報は見つからなかった。雪谷は池上村の字地名で、大塚は鶉の木村の飛び地で字地名になっていたのも、二つの集落に気を使った連名の駅名になったのかもしれない。余談だが、駅名は「雪が谷大塚」、町の名前は「雪谷大塚」、マンション名などでは「XX雪ヶ谷」と統一性がないのが面白い。

雪が谷大塚駅を出ると左に大きくカーブして南南東に走るようになる。

- 御嶽山 駅の北側にある御嶽山(おんたけさん)神社が駅名の由来。神社は天文4年(1535年)頃の創建で、当初は嶺村の小さな神社だったが、天保年間に木曾御嶽山で修業をした行者一山が中興して、御嶽山信仰の客で賑わうようになった。主祭神は國之常立神(くにのこたちのかみ)・國狭土神(くにのさづちのかみ)・豊雲野神(とよくものかみ)。

何気ない素振の住宅街を歩いて行くと突然大きな鳥居とこんもりとした林が見えてくる。正面の鳥居の右側に建つ大きな石に彫られた「御嶽神社」の四文字があたりを睥睨・威圧していた。何とも表現しがたい独特の空気を感じる景色だった。(右画像)

駅に戻って電車を待っていると、プラットフォームの南端から時々轟音が響き渡る。半地下の堀の中を東海道新幹線と横須賀線が走っている。「小さなローカル線が新幹線を見下ろす駅」として、鉄道マニヤの中でも知る人ぞ知る駅。



- 久が原 大正12年(1923年)の開業時の駅名は「末広」だった。のちに東調布→久ヶ原→久が原と変わった。元を辿ると、地形を由来とした地名で「木の原」だったのが転じて久が原となったという説が有力らしいが、「久河原」説もあるようだ。

- 千鳥町 大正15年(1926年)の開業時の駅名は「慶大グランド前」だった。昭和11年(1936年)に千鳥町と改称。大森区調布千鳥町という地名から駅名が付いた。

- 池上 日蓮宗大本山長栄山大国院本門寺を参拝するお客を意識して作った駅だった。池上という地名は、「池亀」説と、当地を領していた池上氏によるという説などがあるが、どれが真説かは不明。本門寺は駅から北へ約1Km、呑川の北岸にある。

- 蓮沼 多摩川の流路の変化によってできた沼地・湿地で、蓮が多く生えていたことから地名が生まれたとする説が有力。駅の北側に真言宗智山派福田山蓮花寺がある。寛弘年間に恵心僧都源信が開山し、1200年代に蓮沼法師が中興した。

蓮沼法師は俗名を荏原有治と言ひ、武蔵國荏原郡の地頭だった。ある日狩に出た時に、雄のオシドリを射殺したが、その晩に雌のオシドリが夢に現れて恨み言を語った。翌日、狩の現場



へ再び行ってみたら、そこには雌のオシドリが死んでいた。荏原有治は心を痛め、菩提心が起こり、出家してこの寺の中興に尽力した。

●蒲田

終着駅の蒲田は、多摩川線と池上線が合流して、扇形に広がるホームと線路が味わい深い。蒲田と言う地名は、泥深い田地を意味するもので、呑川下流の低地そのものである。奈良時代・平安時代の資料に「蒲田郷」と記されているので、その頃から存在していたことがわかる。武蔵國の江戸氏の支流である蒲田氏が所領していたと言われている。ビルの陰に太陽が隠れて、昼の温かさが徐々に消え始める頃だった。駅ビルの中のお店をあてもなく覗き歩いて、帰宅の途に就いた。

以上